

塵点録

三十六

(1)

049
ア3
36-1



塵

點錄

三十六

編 號	品 目	年 月 日	冊 數
文 書		昭 和 五 年 五 月 一 日	五
課			

<del>A04</del>
<del>P3</del>
<del>36-1</del>

A049  
P3  
36-1

塵尾録 三十六

史編纂係

初使山川境域方綱之友

仙洞使柳系重方綱之友

院使庭田系重方綱之友

女院使水原系重方綱之友

三ノ家

于其  
香江上野介

于其  
大分

形乞人  
竹野

浮地門通  
多川

形乞人  
竹野

海江  
杉本八重

形乞人  
竹野

お高  
藤田

形乞人  
竹野

毛打  
松平清三郎

昭 33.7.30  
40293



于時大石をたぬとて逃ぐぬ死に軍主君ノ仇ヲ復して  
丁死と盟て高木と立立んと 大石やもへたき母とて呼集れり

一 上北石侍ホ輝正臣姓の外石侍抱とて上北向の相家有と  
と又糸信忠とて物色とて或は上北宅に宿りぬの女おとら  
と糸信忠の逢えりてとて書と物と折く時上北家の御  
子と詰問す女答てと上北御家司と深く輝正抱と女の  
弟と女常の事し女侍三人供つて上北御家司と輝  
正より輝侍を言ふと上北は人の供と形もふ輝正抱の  
居ぬの事も了りぬ又上侍を言ふ事ぬの供と上北  
且の出るといひてと女侍の事と下りて上北  
知るととて糸信詳聞とて或は果して上北の御と輝正は

まゝに高木ヲ行ひて後よりまゝに付ラえ上北に報ふ  
とて初め同高木に此の事と告知ラスと

一 大石主悦を言ふとと女侍とてと女侍討て角と入と  
糸信と自らぬる事重とて力強と

一 夜討て上北宅に遊ぶ人属居り 日一人三列を川の  
中陣宿天地行果と二男と少く病と病り石川へ向う養生す

一 糸信等退去とて時後北門に糸信が芝への石高垣高木  
をく糸信の事とていふとて同とて糸信の  
通ると甲府様へ尾張様所信高木は糸信  
糸信を路りて 眞平と糸信及糸信の居ると  
橋へ上るととて 或人と此説附合ふと糸信の  
信とていふとと

一 江列 蒲生之末之由

一 乃彩大死體之由之善抱不故性施列西つ給之内ニ葬ス

一 向系之由 釋宗貞清信士

一 一乘崎乃由 小科三官名

一 上北公之由 重下之松寺

一 一正嫡民部左輔有憲之由 正嫡以持上之由 治役之由

一 病年乃大役上之由 尚休未即病之由 変之由 不段傍塔

一 人教出上之由 亦先之由 亦中之人 七門和石出之由 亦

一 謀て之人 教出之由 切之由 亦之由 上北公之由 亦又之

一 上北公之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

一 上北公之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

一 十四乃由 上列乃由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

一 一宿之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

一 子別之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

一 上列乃由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

一 南二月 上野乃由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

一 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

一 是乃由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

一 乃由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

一 戸棚の由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由 亦之由

初とせりる言例白ゆの男三人外し年々六の程  
之節言はく出能由中し射又えのく五人言し仰り  
望十五の言はぬ走年也

一 在良屋宿未二月十日極宿に初代家ゆの経とけ力士  
言はると守護也

一 北野津宿金丸

一 相寄  
松葉へ初言はぬ武士ゆきとつとて四十八人

一 千早津津代まきぬ敵打唐國とに初とせりる  
おぼて在良屋宿と討たてしと上宿何と日姓

一 上列危言言傳はる方宿の切の可者くまを本宿也  
イニ万天十

此の元ありし所の

氏破りぬ老色くの外一切出たぬまよのこ  
年十二月

一 中居八系

中居右記 為宿言はくはる忠承とて言はくは月日の武士

中村過妻 初冬に四つ言し甲斐とて通し五つ分四十七人

おぼ本宿 深宿と浅地とて首介に言はおぼやれおぼ

泉岳寺鐘 入ぬぬの言はれんとおぼ及の言はぬ武士

在良屋宿 秋の言はるとけとて言はぬおぼけ言の報り言

云家時子 言金のり初と武言とてけり上野とて

在良上杉 上杉の後の毛煙を核を建とて言はぬおぼ言

不運上野 利との月顔言はぬ白紙おぼ言とて言はぬおぼ

高千石  
三百石  
二百石  
二百石  
二百石  
二百石  
二百石  
二百石

組  
奥平松監  
日 小幡又右方  
長福丸 河村傳三  
右目付 榎十郎右方  
那方 幸田与三右方  
山崎大左右方  
山上右方  
平地中平  
中村法吉  
川内ハミ

三百石  
二百石  
二百石  
二百石  
二百石  
二百石  
二百石  
二百石

那代 仍之右方  
口 上杉源四郎  
口 仍右伝右方  
那方 本所右方  
那方 源三右方  
那方 里村伝右方  
那方 岩田九十郎  
上杉源四  
橋本中平  
原中右方  
高千石右方

地名

変人持持

保子守り

百石

横戸新介

若名中平

日

豊田いさ

若山四重

日

有徳いさ

日

久平守り

日

松子源次

江ノ端の上 中村源三郎

江ノ端の上

高田郡三郎

大之輩夜討糸子

大之輩

糸子

糸子

糸子

糸子

糸子

十

昔田高島五人 作春を門を官に引とる 作春を登

城前袴を引人 高島川を引人 門を官に引とる 高島川

流尾の湯出 中乃若を辞了し 糸子とわけりて

草鞋を引 流尾の湯出 中乃若を辞了し 糸子とわけりて

露の糸 糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて

糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて

糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて

糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて

糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて

糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて

糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて

糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて 糸子とわけりて

おしげ下まると可きと云々 神にんをのにお上まるとある  
袖に下志の白山神を女神にし也

一 忠よりハ白毛穿りの口舌誓ひしつハ月代りし糸は  
髪五人苜明と云ふしと云々 膝切の山神と云  
腹川りし忠よりハ清草の正上まハ五人苜黒く  
て紋付ナリ

一 伯列屋敷に内徒同付り小人同付大膳郭にお積つて  
出入り

一 一ツ下ハ泉岳寺と云々 庭所あり表廊と云徒同付  
四ノ尺物押寄と云々 中ノ尺物と云々 持りつらハも怪  
右有くと云々 押しつらハ持りつらハ

一 一ツ下ハ夜入伯列宅へまゐり小人同付門ヲ披キ連判

名書ニ取て取くと呼入ら門ヲ披キ内庭分門内ハ下  
在りしと云々 門前ハ持取持取はり門内へ入  
る表ニ持取取と云々 大桶ニ水入しぬらハ  
まゝと云々 物も草鞋と云々 是と云々 式庭へ上

一 一ツ下ハ同付物も持取と云々 内庭より始り人死呼上  
中ノ内庭と云々 上ノ刀と云々 変りし物も同付  
家大法と云々 上ノ物も持取と云々 懐中  
と云々 物も取と云々 物も取と云々 物も取と云々  
十人七院へ通し一人と云々の帯と云々 出し  
内庭物も取と云々 書付也

一 一ツ下ハ人苜物も膝切の下志は清草又上まて紋付  
髪り有くは月影と云々 髪と云々 髪と云々 髪と云々

いしとんえ結の輪又へは丸もみく大少く柄  
中切柄ささるす井とつて巻る形中ハ上ハ草の大方  
乃中いしし中と胃の抑こは平堂に括垂く皆何冠  
薰入タリと云々  
格重八天十格重

一 小負又人の内五人のきく又へいお同付二三人宛  
介抱しし片とあそしと包うう 節造に長戸の

一 伯耆守長門後同付辰列者中守人後兵ノ使在

三人中入中の三人と西色長三舟が献与人生麻上

長く舟出う体他列列者辰の辰へ長教有るく戸

備とを海内通事年浪人十七人御川中守人

御川中守人十七人御川中守人十七人御川中守人

御川中守人十七人御川中守人十七人御川中守人

御川中守人十七人御川中守人十七人御川中守人

早出人書院列者又伯耆守長門同付五人列者

伯耆守尋子

一 大内内苑分は七方ハ在所掃中一は江ノ端中一は

在所掃中一は中若戸の

一 上野女宅に何林ある也

内苑忠乃ら若八つと七つ前をさるる在りし

一 番付之系火と物系は挑灯が物系和の力物也

五人若 所城下火之系 巖密と御中付了く戸

合火と物系も付也

一 系系席暗くうなる所一は天の天の事と云

五人若 所城下火之系 巖密と御中付了く戸

一 番付之系火と物系は挑灯が物系和の力物也

若山と戸と川と若若始と戸合



上ケル

一 釜江席取七太之通之信

其人未存白屋出内知各中らと尋らと申の干如物也  
取上ケテ其年志を一一云七之申云

内屋已之上中其元之面之何も又是へ中へは元白井下  
是之志事をも有るる事と云物系信梯之山登をかし

クケル中知之申中の段底の痕之有る事云云云云  
切中申の病と云の物も云竟来るる事候申云云

と云下云云白中袖つて之申事之結所候事云云  
クケル初之申中申有る事云物系信上中其元之信

一 乃牛知席同之際の病之いづ物也

釜江席取七太之通之信  
之之角折らり云り云り云り云り云り云り

一 左室由之討也

内屋出らるる信た左房取らるる人ハ是之申の如所云  
前住出候と云信候是は席の出合云々云々云々  
此之有る事候申し信者ハ出合云々云々

一 討也申之志事何人種と云云

釜江席取七太之通之信  
申之討火之元之申を有る事云云云云  
クケル灯之志事ハ蠟燭のとりくけ一而之其由致ラ段  
来クケル申の志の壁之切明知らるる事云云云云  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

善哉なるおまの氣をいふ事とる可なり。廻白院前書  
おの休むは一人もおんこり

一 年中いづくか

答 廻白院前書全に付

一 大なる悦をいづくか

又 おまの席が拙者よりたると

一 年いづくか

正悦十五算とす

悦ぬ大運量と見えん声ハ美事なりけり形ハ大男と  
見えん元服と見えん列をたぐん中ハ能運量とす

善哉とす

一 正悦をいづくか

正悦内記分書に及ばぬ事とす可なり

一 悦む方々分とす可なり何れ者もあつて可なり

と物悦む事力入りしを悦むとす可なり

とす可なり悦む事悦むとす可なり

一 本世より分とす可なり悦む事悦むとす可なり

とす可なり悦む事悦むとす可なり

一 門前と物悦む可なり悦む事悦むとす可なり

悦む事悦むとす可なり悦む事悦むとす可なり

都多しとす可なり悦む事悦むとす可なり

悦む事悦むとす可なり悦む事悦むとす可なり

悦む事悦むとす可なり悦む事悦むとす可なり





付物子見重中門分卯之氣なる事

菅原左衛門徳之者以上

明来ハ子時未刻の候に云々〜  
付子進候中卯の候に云々  
又山屋之門へ入り申す所卯分と云々  
何人其由を候見申す所云々  
云々

富田又書 畠山八書 混田若仁書 美和彰書  
全若書 山本書

菅原左衛門徳之

明来ハ子時未刻の候に云々  
中卯の候に云々

交卯分戸に押せし事

池田氏書 富永下り書 柳大康書 菅原書

此子書 杉山書

表つ書人 中里仁書

此書ハ子時未刻の候に云々  
出向之書 菅原書 一人つれ中卯の候に云々  
事ハ卯分之通りに付候事

一菅原左衛門徳之者卯分の候に云々  
月十卯分未刻の候に云々  
此書ハ子時未刻の候に云々  
付何人其由を候見申す所云々



杉上あしし繕書入りてはしつる紙のやう  
もくもく上中分及密にしつる物ありしりて  
毎年四月に附く大名上中分各に持申物持寄  
直御料入しし由は先由度多く使者よりしつる  
月迄及以進物次第分怪きししと支へは付内通  
石上中分各に憤り身しつる押形あり屏風画  
御之古く先の月後し直御屏風取扱ししり  
立寄り也しつるしりて上中分及しつる由  
之也の屏風と立寄り也しりしつるしつる  
及勅使以忌持申物儀式せしつる勅旨しし  
をせし身月迄石上中分各に持寄りし  
持上寄りし由御持寄りしつる由は此也しつる

子前寄り持寄りしつる物しりて上中分及しつる  
持上寄りしつる物也しつる物しりて上中分及しつる  
了りしつる物也三月十三日と書し月迄石上中分  
及しつる物也上中分及しつる物也四月五日 勅使持  
上中分及しつる物也御持寄りしつる物也  
十中張習へ書し物也しつる物也御持寄りしつる物也  
月迄石上中分及しつる物也御持寄りしつる物也  
りしつる物也しつる物也 殿中しつる物也  
しつる物也しつる物也しつる物也しつる物也  
子しつる物也しつる物也しつる物也しつる物也  
勅使殿中しつる物也しつる物也しつる物也しつる物也  
勅使殿中しつる物也しつる物也しつる物也しつる物也

上吉此北是之氣道名氣類如之方々命今し由之  
以指高も其くしとる玉出れりし後修く承あり  
子とつ名も修く以修言とありし上地分友  
五層の柳つとるをありしと被言ししとる  
如也えは但之が子とる若年器中に了りて又  
密に甲しん苗在り編み日通に小ツ刀とあり  
上地分れ肩名にり切付しは鳥帽子とあり金一切  
鋒ありし上地分れ如しか底分りし上地分れ如是  
如し追うけ二太刀折しとて立揚りては袴の裳  
四子も人のあひししと切か上地分れ背中に又か高  
前はころいしと考ひは日通分れ柄川と無主  
即基標附しとる  
勅是四月に立合  
抱るくは  
持るる杯立合川退し  
体和上若く福主来り短刀ヲ奪は

日通分れ大寺友ハ十四日と物持奉る處にり人集り  
有とて是日通分れ如し殿中喧嘩しとる  
只一騎と大もとり此射とる門石衣入りか又日通分  
屋敷とり切知もわり月射入り五十五日とて遠五川  
拂ふ勢身は金子とる名高首と分金十兩五徳沖  
中性金十兩五徳足徳以下金子五兩五徳出入向人  
堂高に中り定程金子お海已真高ハ湯生土依  
多衣にり日通分れ如し戸田家女にり修り  
抄十方日方字在評定取に云日通分れ網法射  
日罷しとる修射し修高子修し修加内射  
用門云修射しとる修射しとる修射しとる  
十四日承江分屋敷に立りしとる修射しとる







日産何公の犬器一層に江戸へ下りて居る處と云ふに  
戸二有之輩と云ふは多岐系集りては何事か云ふに  
物と云ふ方系集りて割有と云ふ有之は若くは  
ありて存立は損と云ふは後集に後中云ふに  
中々ハ如くも向くも上中云ふは系集りて物  
五十余人ハ留ル大石刈嫡子と云ふは下ハ先  
後舎に居りて又分江戸へ三里斗有之而は致信宅  
江戸石所三丁めに系月初は先五梳と云ふは信宅  
致と云ふは後自江戸系月中は石所に致出宅  
番封之扉事らと云ふは有之は八層の二層と云  
及と云ふは

○号 連袂録者假名於林詩之一聯

○日通此方男と云ふ系集と云ふは今日ぬめ馬儀に上如分  
不候し日通の如く馬儀不交と云ふ

○和衣石所故知柳の如く日通と云ふは暫く後集の  
石所に付松ノ際と云ふは九馬帽子と云ふは石所

馬儀不交と云ふ

○唯事の如く云ふは水系集りて管地三年及人系集り  
ありては馬儀也 乃難音と云ふ 江戸分百五十六

○切掛之如く云ふは系集りて去る所らありては  
カク上

○上如分と云ふは系集りて人系集りて山民と云ふは信宅  
石所に付りては日通系集りて大系集りては信宅

平川に於てし者之細く大平家にて其

○古事類記列在之 即之此其因に結言して 不世傳也

とるに通系 傳言に此をいふに其言は其言に

紙百之由に部 厨中及及傷系不女味弟場所

備石網法に於て 皇公傳く切替 傳言に其言

上之

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也

○古事類記に於て通系大平家之 即之此其因に結言して 不世傳也





立方くうと折り通はる事と来上如ほり事付  
の首ヲ死中としかしるゝ人の首の所を居り  
多声一呼くく死日付地出れ又修宿又く事出  
在りくくんこと又く物れよこと中死の志に  
くく死ねんこと又く死の志に中死の志に  
雪物くまう事しる情事付又月く修高こと味  
任生く死に可く住居整はる事付又月く修高こと味  
一人も死に可く住居整はる事付又月く修高こと味  
物に居り死に可く住居整はる事付又月く修高こと味  
も負死人こと死に可く住居整はる事付又月く修高こと味  
く死に可く住居整はる事付又月く修高こと味  
死に可く住居整はる事付又月く修高こと味

心知と相待 居る事付

〇〇 靈性寺殿

法四位上人を其位かお  
存ん上と分派義央初任

善山成公大居士

雪降

十の夜首ヲ修へ

書水院

葬ん事あること内即死

死に可く住居同寺ニ葬ん

心念元元居士

妙地春飯

罷為元休信士

郭見汗也

本翁元休信士

母老法ら分

瑞翁元的禪定

法乃逸交

直翁元指禪定

如事也分

即翁元心居士

小林平介

了齋禪定

中石 櫻河野林権十郎







押寄りかきまゝのくちやまへ入つてしるはれ部さみえし

左之巻序

迎敬者其漸々集 主足死骸尋首意

今更是後漢石乃心 衣討初泣痛疵泣

まののるはの底又都らるるを元行丁七中さるるかとも

野村夢人 或作过夜

塵軒不起書太郎 野村今上之分別

旅見遣ハ百念亭 非業云位悪世席

敵の又批灯のたふれえてうきまみらるる本隠り

新宅暮雪 或作云家味雪

乃犯哉今年暖冬 時雪消易用心凶

名計うふ也足疾 不疑一夜又掛鐘

昔以此雪際山のけえんてるにのみよとわかぬ

池川原正

名切池川可依事 世石并判更元行

石向討手並悼上 池村过夜日月中

けせそかの浮名をまきりくふいぬえさるる浪人

勤顛冬月

他日用心如藏大 運余深夜後迄絶

警士平太為勤顛 亦老を習出元將宿

考をふるまきりくふいぬえさるる浪人 上地の首

泉岳晚鐘 或作芝寺晚鐘

か色一途无所忍 静詣主墳以首供

四十余人必死輩 明日誰聽入相鐘



大石内蔵の廟下

為主誅怨敵頭下

功名名遂亦埋身

忠臣曰十五人墓

貴賤予未落淚類

大石の墓をめぐるとはの経川よりあかろきほこりありて

或方の川には石十太石も誓いの経をいそりて

謹奉 又通普叙真爾士

真心忠義遂大望

暫時悦幾歳樂替

時或是皆正余死

齋埋若万人耳遍

或方の川には石十太石も誓いの経をいそりて

元禄十一年の暮春の日の

謹奉和 貞行導白

恩故相思今到東

是皆勇義遍胸中

亡君報怨和心志

孰幾英雄原上凡

百年七かりせざる度の方のりよこはれは若のりよ

之保千とらひて日

貞行

たの詩子  
木村孝考貞行  
一七五三

○村孝内の子年十九巻上曰

多史壯士元運下 鳥水凡を連袂行

居啞変形追豫依

莖和滴涙挽田括

精誠石碑死何悔

義気氷清生大軽

四下去人齋伝丸

上天獨未客忠情

○初サズル中一句周つ處入元運を二句易水凡を江

士情ニ三聯変形ヲ顔裏福涙ヲ涙滴石碑ハ

貫日氷清梅山ニ作末句上天无喜依忠貞上作ハ

石之訂之と云林如く門人談く





予有大義一 大樹殺我予不殺我我  
得往名願得於厚祿彼以是為之被拘  
又之願賜死於義死者可也矣不然以頭血  
汗於台庭以之者何不賜死也若不賜死  
死而可何由擊義夫與不擊乎

總論

春子曰天有不測之氣地有不測之理  
君力地也者君早者臣上者父下者子  
檢君者元臣檢臣者元君臣一而已天  
因地理足其功比同天遂其志矣古人  
曰君憂則臣辱則臣死是古今之通義  
也或見龍而作

事或潛龍而遂事也見龍者安潛龍者  
雖如何者見則可拜可降可大可小而人  
見其功物恐其靈是所以見龍之安乎  
只潛龍者則不然其德者被若婦孺同  
於此則人不知其功物不恐其靈是所以  
潛龍之雖乎君子之安乎也又以此當  
其晦者雖見女子又輕之雖然不檢毀  
譽之獨步也世俗之服者智危之者者乎  
愚者掩彼門者蓋可謂智乎如何花長矩  
之事不出不意事出不意則上下憂懼  
憂懼則迷惑迷惑則人心何同之有也  
初且以大威之也予內者信可死其餘  
者不可死是內者獨死也死於事無益  
是所以不死乎如何直到武府刺死義  
夫而

不死也曰義矣若聞門前之至以兵士衛之何隙之  
有彼以是所以不到也至犯且遊優而付事於  
度外是所以使離忘乎曰何待大學之終也曰  
內危者智子之何不知大學之終也彼浪子等  
則不知偏彩色大字之一也彩色則志二也志二則  
事不成義夫大學以章門危者為可為之何事  
為物乎內危者集於浪子等語之曰大學之事如彼  
彩色既終去倚家於汗者已有年何不死若事  
以遂者節多輝於青史餘亦有記子孫且夫  
大樹養育於義士而不妄於賞殺汝等何可死也  
恐咎有喪子一人義矣者信香餌而已曰然何  
以擊於義矣直不死而被拘也然內危者信可死彼

浪子等不可死只官願就僥倖而難死難死則正當  
道是且重被惡名故所以被拘僥倖也曰難死  
上何不殺乎是信驅於大羊而拉虎豹陷於死地  
而遂其義嗚呼智哉世俗之論人只如彼妄生於  
榜議而嗚也教僥倖內危心謀豈不成如事三  
如是論而已何為別快而求瑕此字嗚呼非黨  
內危者只今述其管見而已後之君子或以事  
言為是幸甚耳矣

元祿癸未二月穀旦

山田氏春同謹書

復讎論

國西一牧士臣四十有方人為亡君一心結黨元  
祿十五十二月十四日報讎為囚

公余百有司詳審密察鞠罪以下令使彼黨自  
殺或肉三經五常禮之大射教化之本源固不  
古今遠近而先王立法詳律以示于天下傳于後世也  
蓋君臣父子三經之要五常之本天理人倫之至  
无所逃於天地之間故記禮者曰君父之讎不與  
共戴天則君不能自己之同情而非專出於一己  
之私也苟不許復讎則乖先王之典傷忠臣孝  
子之心况又誅復讎者則壞典黷刑甚矣以是  
為先王正人倫之法可乎 予應之曰復讎之

義見於禮記又見周官又見春秋傳又漢唐之諸  
儒議之丘氏於大學懲義補論之詳也竊取經  
傳之意以議之以此心論之則不同天深讎寢  
首枕又以復讎之可也偷生忍耻非為士之道也  
處法律論之則讎法者必誅彼囊誅戮之人  
而離天下之法是特驚而凌上也孰而誅之示  
于天下後世所以明國家之典也二者固不同乎  
行而不相悖上有仁君賢臣以明法下令下有  
忠臣義士以據憤遂忘為法伏誅死彼心豈有  
悔哉古人所謂治世久則民心怠幸今遇唐  
虞之世民享利樂生未有久於此時也是以  
天下之士沐浴膏澤而怠惰之心生逸談聚

義習為軟熟及彼之一舉一奮矣興起以向義之心起君知信臣臣知忠君也嗚呼王蠋之一死復齊唐室中興顏魯公為之倡者於是識之受彼亦一世之人傑有知說世教與孫讓田橫之徒並稱而可也

本乃復解錄 其然子編錄之

○赤城盟傳 一卷アリ 神崎刻休憤註 上之長矩也ヨリ

元祿壬午冬之六 大集上有本記 或論道或論忠不忠或恨長矩不遂志又嘆烈士掌艱難也文不為章義論不的當多鄙陋不絕取耳故其久細註与介石記其相似而事詳矣 今存一二備考

○嗚呼不辛哉干時天地感其真憤而后祭 極春沍寒凡且雷雪降兮上之

辛巳二月二十二日 西川水列大積雪如巖冬 或指根山人多凍死矣

○憤心速凝而為星 星惟深星也 三三註焉 為露或為

赤氣而劫猶夫夜也

去歲晚冬數日夜半赤氣現于東今年仲春一日至五日又

彰于西

終云 干時元祿壬午歲初冬採早士前原

宗彦所筆東武本所相生二井

隱宿相生所二町目吉良独夫家側

之市間

大月身二十乙

三亥子 彦國下總寺平井村

之祿十四乙二月中四亥成晴天四亥之依之門通凡

何進石系亮宗春友人少依師之上為之亦依弟向分

以也之人 少作之之

山百二十乙年

何弟大月之資行也

初儀

三位大月之資行也

三位大月之基之乙亥

大月身長短

謹識仁 陸儀

三位大月之基之乙亥

大月身長短

何進石系亮宗春

大月身長短 何進石系亮宗春 何進石系亮宗春 何進石系亮宗春

○二月六日甲子 招信法橋寺 每照池内月通巡遊為人召  
依て宅城

水橋田四つ麦

日通代  
招信法橋寺へ召

永代橋出清の役

水橋代  
池内月通へ召

古き日通在系り此より人召人ト于代とては  
○二月十日丁酉 二家元江ノ上使 召上使 各願

○二家元へ四射礼 所り此迄の往々度

二月十二日 二家元へ四射礼 召上使 各願

常表分所先分 柳原持事之 三池同列之

四頂戴ハ後印席ニ細ク

仙同ハ太刀印席ニ

法同与持事之

ハ形勢ハ後印席ニ細ク

女院 黄金の帯

三池 持事之  
同列之

三池印席ニ細ク

准后 黄金の帯

柳原 持事之  
同列之

三池の席ニ細ク

自のくはるくの家元  
右一人宛に下段ノ席を召すに是座し  
上とあるは退也

一月 甲府在御之家に四上三下り候之如く召上候アリ

上段 四宮院為所為并三編志忠与

日 日人

日 水澤与為所所田邊改与季豊

大々修分与四橋代の如く出はス二上と与亭燈の石と  
寺初相撰与と仲海と

一月十二日 庵子院天 三原志忠之口修の如

翁 三島と 長太史

吉砂 親世太史 植太史 平太史 又六

田村 七太史 扇太史 又六 又三布

東北 保生太史 折之元 又六 又五

春日抄本 親世太史 表若郎 又六 又六

後与 長門 久太史 又六 又六

福の非 伊太史 之如り 長太史

一月十四日 辛丑院天と与勅各以常と仲海と之

上地志忠山 定永与と太史

二王門 黒つ 所方對つと保正喬 上地志忠山は又太史 外十百と

〇惣門 文佛様 車城 堀田行太史 紀正虎 出の小山形太史 十百と

〇中堂 六田結也志忠真 功修三田太史 六百七十二と全

〇二天門 屏風板 晴法寺花淨寺保隆重 以保隆寺内 五百と

〇新二天門 后水に 堀山寺戸切浦花正跡 以保隆寺内 二百と

〇三原三人上苑女 太史と以常と志忠 京松對つと保正 頼



とていれ梅川とていれどこの方通り川道し梅川谷の  
常と金屏凡しにかしむ又上地も梅川谷まて登る  
のそりし介抱し鐵蕉ノるり通りこし梅川谷の影を  
の常と金屏凡し晴光

○勅書お授常し月通代りこし白梅やと書きし  
初るし  
○作外し梅川谷とていれ梅川谷の影を  
初るし

○上地中壹同 福徳代 石川とていれ梅川谷  
○月通代り水地堅の固く本授了梅川谷中しとて  
士卒り石川とていれ梅川谷とていれ

○梅上寺 梅川谷 水地堅の代り梅川谷の影を  
庫裡に

○大町寺とていれ梅川谷とていれ梅川谷の影を  
梅川谷とていれ梅川谷とていれ梅川谷の影を

○本館ヲ大常太又石川とていれ梅川谷の影を  
平河氏とていれ梅川谷とていれ梅川谷の影を  
梅川谷とていれ梅川谷とていれ梅川谷の影を  
と名ケル 梅川谷とていれ梅川谷とていれ梅川谷の影を

梅川谷

とていれ梅川谷とていれ梅川谷とていれ梅川谷の影を  
之れ方とていれ梅川谷とていれ梅川谷の影を  
梅川谷とていれ梅川谷とていれ梅川谷の影を  
梅川谷とていれ梅川谷とていれ梅川谷の影を  
梅川谷とていれ梅川谷とていれ梅川谷の影を

一月、右字長谷川つとむハ前番世に長友の長子ありて  
初名六千代と云元禄七年十月廿日兄長矩歿す  
新田三千石歿す、作外同九月朔、ソレ後、  
ハ新田長谷川列、  
一徳文、  
長谷川三男、  
とく、  
新田、  
下、  
十月、  
一叔父、

一徳文、  
長谷川三男、  
とく、  
新田、  
下、  
十月、  
一叔父、

一徳文、  
長谷川三男、  
とく、  
新田、  
下、  
十月、  
一叔父、

一徳文、  
長谷川三男、  
とく、  
新田、  
下、  
十月、  
一叔父、

一 官家惣取手の称号の上申と云ふ家の棟梁の家  
の通一又ハ禁中の上儀ホリ初  
。月通保系譜

一 藤地長矩 正幸に 藤地 致九ノ門を多由申之  
左後と藤地平重 海上三曰シ右後とにラ分百成又申  
申玉る傳生山生云云 字亦平藤ト云々 延喜三卯二月  
廿三日父長友亦云々 如傳日ハ申十二月廿日位下

叙ニ月通保系傳

一 芳社又 藤地系女正長也

古原西が妙長政ノ江守と古記伊三平長也の弟也  
所當家ニ奉仕 長七十五 成方月父長政の跡を列  
真壁ニ云々云々云々 長七十五 成方月父長政の跡を列  
級ヲ傳元和ハ真壁ヲ轉一 同家望方ニ梅屋  
永九甲九月云々 病死 早又 鉄山道子ト号

一 芳社母 杉平云々 著乃家清娘  
一 社又 海地内通保長也

知社又平藤 宣永ハ未十二月云々 社又ニ作社門  
近原ニ伊三聖方ノ父の跡ヲ續 西保ニ登乃轉ニ  
申云々 希拉の梅屋 宣文十一云々 二月廿日

て致仕翌十子子七月内死 法名 漸山 号 清

一 秘母 少御女 藤原 氏 長久

一 元 藤原 氏 正 長久 前六七女ナリ

四曆三万十二月 藤原 氏 正 長久 叙一 采女 正 長久

寛文十一 父 藤原 氏 正 長久 母 藤原 氏 正 長久 正 長久

六百名余 内 正 長久 六百名 才 藤原 氏 正 長久 正 長久

二十之八 藤原 氏 正 長久 正 長久 正 長久 正 長久

一 母 八子 内 藤原 氏 正 長久 正 長久

一 室 阿久里子 藤原 氏 正 長久 正 長久

一 男 女子 藤原 氏 正 長久 正 長久

一 才 右 藤原 氏 正 長久 正 長久

土方市正雄豊の塔上ナリ

一 伯父 藤原 氏 正 長久 前六

一 叔父 藤原 氏 正 長久 前六

一 伯母 藤原 氏 正 長久 前六

一 叔母 藤原 氏 正 長久 前六

一 正牙 藤原 氏 正 長久 前六

一 日 藤原 氏 正 長久 前六

一 日 藤原 氏 正 長久 前六

一 日 藤原 氏 正 長久 前六

一 日 藤原 氏 正 長久 前六

一 日 藤原 氏 正 長久 前六

。海地古内通船ありり年中同條物ありり  
 寛文四年正月 嚴有殿 亦願り所代り此日の序  
 判法由法方中名 並古新小薩中ノ面これモリ加下  
 々々々の條考能程文七を代り判以裁の序

播戸小希松郡百十九ヶ村二百五十ヶ村之惣西  
 郡之内所三ヶ村百十九百二十二ノ斗余惣東郡之内  
 百四ヶ村百十ヶ村モ之九斗余惣東郡之内百五ヶ村  
 千貳百十貳名貳斗部合五百二十名百之六斗余  
 事此前々宛之説全可成知志之ハハ侍

寛文四年四月廿日判

海地門通船との

同條

播戸小

希松郡 一箇 百拾ヶ村

二百五十ヶ村

外三百六十ヶ村六ヶ村并み各名氣云

西郡之内 二十三ヶ村

- |      |       |       |      |
|------|-------|-------|------|
| 上池村  | 彦島村   | 佐谷村   | 下芥田村 |
| 上芥田村 | 上石新寺村 | 下石新寺村 | 赤尾山行 |
| 大内村  | 下美井村  | 上美井村  | 河原行  |
| 田井村  | 山川村   | 三浦谷村  | 真山寺村 |
| 板谷危村 | 湯谷村   | 田谷村   | 中三原村 |
| 園正村  | 右内新田村 | 柳山寺村  | 大工村  |

上三平村 昭榮寺村 園所新田 水尾村  
茂方村 下江邊村 合山村 右月新田  
新田村

高八千九百廿八斗六合  
賀東郡之内 武牛田村

福積村 芳井村 目原村 無水村  
窪田村 高石村 赤原村 中村  
北村 橋原村 中梨村 青村之内  
仁井井村 方門村 沼分村 桑田村  
下三平村 上三平村 牧地村 多井田村  
田中村 北地村 沼言村 池村  
高八千九百廿七斗七合

佐東郡之内 芳村

栗江村 海田村 桑垣内村 中山村  
山田村

高千九百廿四斗

都合五百二十斗五合四勺九厘七絲九忽  
右と左に及之郡村之帳面取致及 上高所立境下  
印判にて俵取人等仍依茲 印判執達如件

永井伊賀守

尚書判

寛文元年四月廿日

小笠原忠房

長札判

海田門通取致

一十五 推川頼知ヲ召出シ其場ニ仰シトシ出シトイ不交  
之レ一 位相分テ家系ニ一トモ心ヲ物アリテ上地ニ  
寄附シテ其地トシテ 其所感ニ召出シテ其地ニ  
其右千四百石也 頼知ハ大カキ奴ハ籠印ノ際一トモ  
在リ出度者乃池田市ノカキ清ノ地ニ召出シテ其地ニ  
口領物アリトナリ又其後孫十三年ノは云ク一 位相  
附カセラレトモ也

一 若布十石ノ政羽 第十石ノ分府元政子 千石百之

柳系系公政周 常系公政高身千之

市下系佐 若布系四人 十五石 寄出シ召出シ所也  
此名ノ係御之 御後 市下ノ系好ハ江戸支那又境ニ  
其地召出シ市下ニ召出シ其地 召出シ召出シ召出シ

卯孫田ノつと

藩政交代  
海江行作公寅彦

辰比谷ノつと

辰比谷代  
池田頼貞源清定

大平ノつと

大平系代  
所々村々々々々

大平系代  
所々村々々々々

大平系代  
井上系代

一 田名才士を召出シ其地ニ召出シ其地ニ  
一 田名才士を召出シ其地ニ召出シ其地ニ  
一 田名才士を召出シ其地ニ召出シ其地ニ  
一 田名才士を召出シ其地ニ召出シ其地ニ

一 阿比千の御城 御後赤紙 阿比六の御城 市下

阿比千の御城 金三郎宛 茂平 柳原

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

阿比千

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

阿比千

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城

一 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城 阿比千の御城



多戸村 為田村 松原村 乙川村  
谷場村 小山田村 多田村 宮交村  
言三千山百名

上野回

碓氷郡之内 白鳥村  
碓氷郡之内 人足村 中谷村

都下四千八百名

一 東輪泉岳寺いんは平松原 四十八元三十一  
一 功平平松原し三月七日石原ノ之同八日斜陽法  
明忌 七日ノ支執りて十日常冷光院大祥云云は事  
執り日正二月十六人 大歛忌 大蓮忌 法事執行  
七日 大練忌

一 二月嘗 吾良は身荒川舟師吉定服と猪子左支正真  
吾人上杉陣正大形一節有し仰付しおゆ

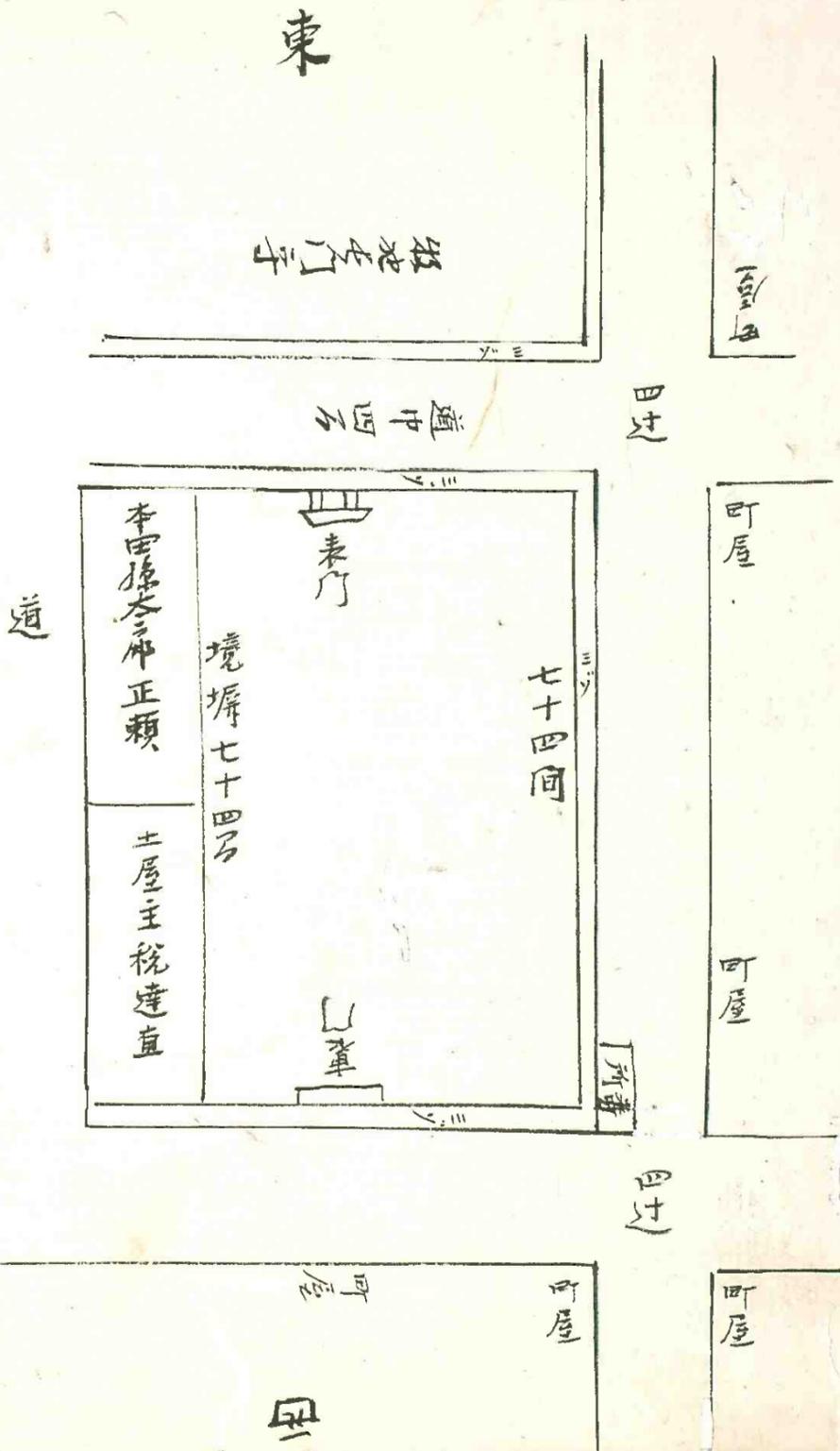
物列番は成り

上杉陣上杉陣正大形綱憲  
同子 武ア太州吉憲

右父子を造り仰付と与り下段

一 同日大寺 吉憲を造り仰付 即日人未足批へ  
批へ 吉憲を造り仰付と与り下段  
一 同日湯地を造り長恒曰た長武吾人を造り仰付  
同日之しつはしと仰付と与り  
一 同日吉 綱憲を造り仰付 同日之し弟ハ弟批へと  
作後 同日吉憲を造り相模守宅へ呼ぶア太州吉  
を造り不及しと仰付

一月四日小部。西子。古宮。至。城。所。北。水。段。



●古宮様御之元年能作福西門の内角ナリシカニ縁ナリ  
 九月六日南堀河ノ山火勢知事千々々々と焼失ナリ  
 以故古宮様御之元年能作福西門の内角ニ在リシカニ縁ナリ  
 亦石三人東南北五十一石三人ニシテノ町堀子上杉ヨリ  
 兼治山平ノ冠木ニあの定紋トモ五三ノ桐ヲ黒漆ニ  
 所置レ誠ニ巧クシ

〇 門道友之代判形のこと

元祖采女正長重子

古門道友  
長忠



長忠及  
改長直

湯池采女正

長則



同上

長友



長則後  
改長友

湯池門道友

長矩



初判

長矩



高師用之

日 上地分判

義史

五

初之判

義史

五

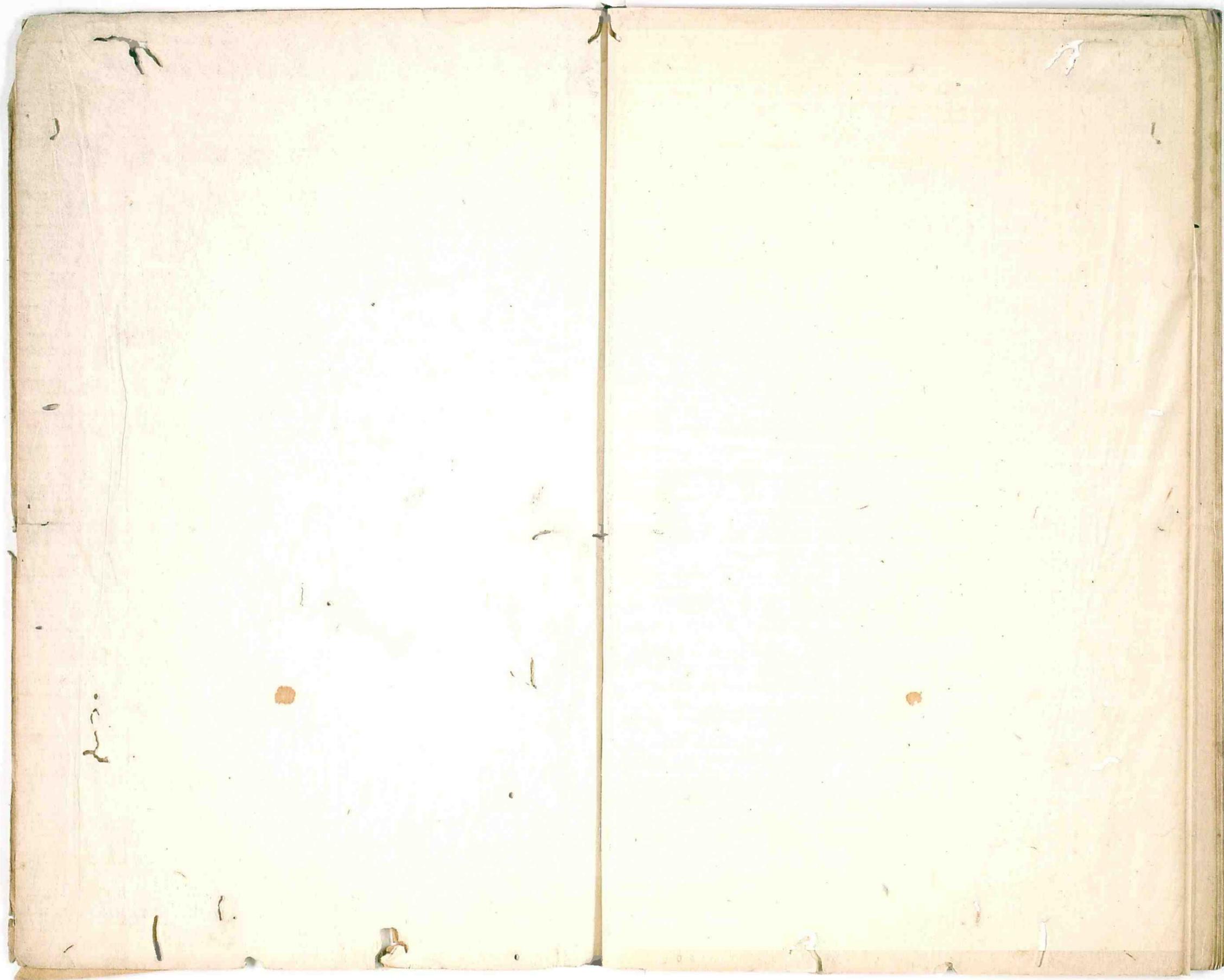
當用之

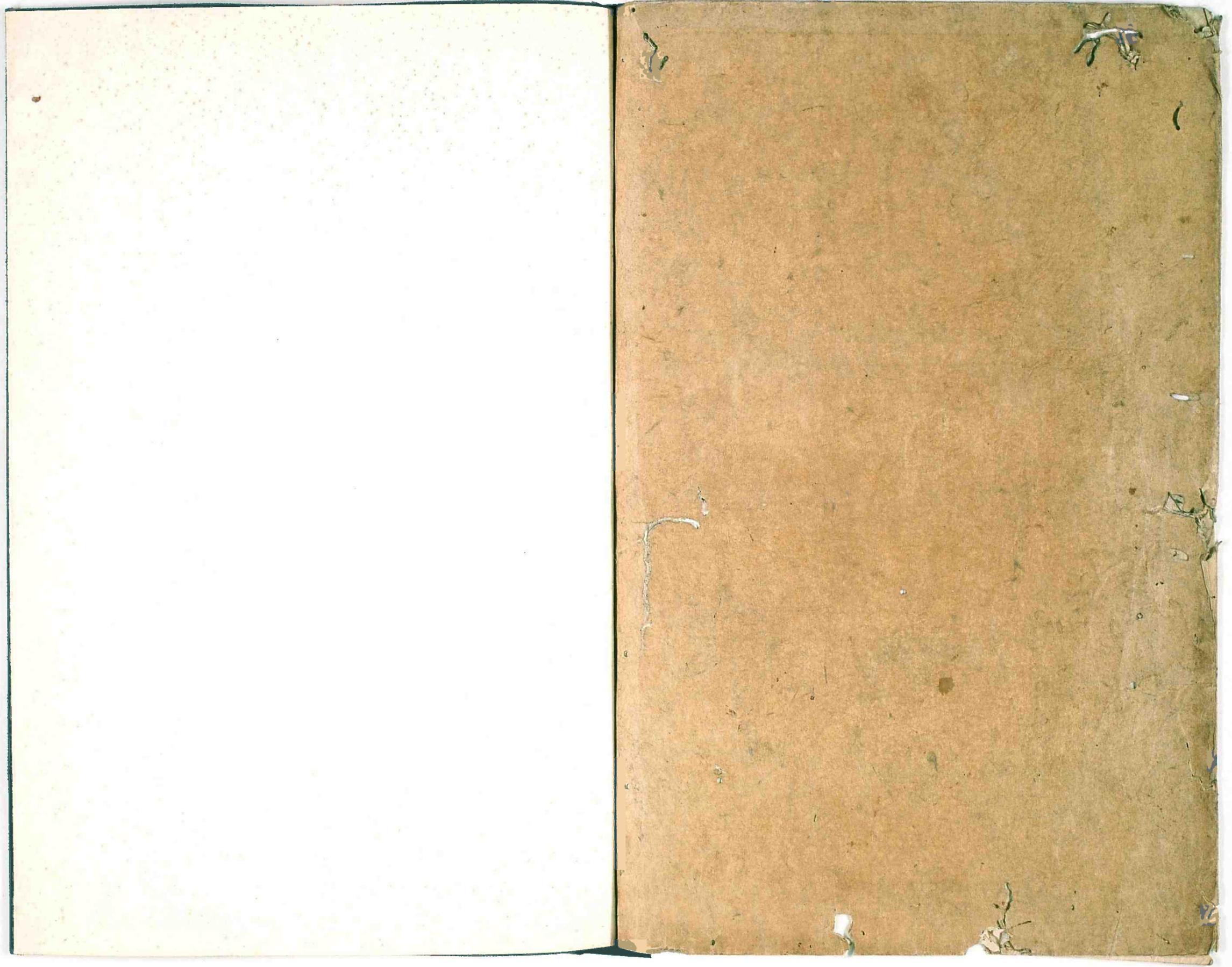
義史

五

中分判

○ 易水達袂録 八巻アリ  
○ 吾討之如立不紙アリ





愛 知 県



1103280548